



まだまだ暑い中、2学期がスタート！

数多くの感動とともに閉幕したパリオリンピック。これまでの価値観だけでは語れない選手の姿やドラマを見ることができたのではないのでしょうか。そして8月28日に開幕するパリパラリンピックでも新たな感動を感じることが出来る場面を見逃さずになりたいと思います。子どもたちを前にして、オリンピックの様々な場面で受け止め感じた姿や場面を子どもたちに話す機会があるかと思えます。みなさんのどんな感動を言葉にして子どもたちに伝えるのか、自分なりに考えてみましょう。

夏休み中に経験した様々な出来事を子どもたちがどんな言葉で語るのかということも楽しみにしたいです。一人一人の感じ方や語り方は違いますが、子どもに寄り添い、子どもの成長が感じられるような聴き方ができる教師でありたいですね。

まだまだ暑さが厳しい2学期のスタートになるかと思えますが、各学校において充実した2学期となることを期待しています。



センター内の掲示版の一コマ



研修センター内にある掲示版に、不定期に「心に残った一節」が張られているコーナーができました。ある指導主事が読んだ本の中から選んだものですが、ハッ！と原点を思い出させてくれるものだったり、なるほどなあと思えて深く考えさせられるものだったりしています。

一つの文章や言葉から、ああでもない、こうでもないと考えたことや感じたことを言葉にしてほかの指導主事と話すことで、自分自身の思い至らなかった点に気づくことができたり、自分の考えたこと・感じたことの裏付けになったりすることが多々ありました。

疑問や感じたことを話してみる、聴いてもらうことで、自分自身の考え（学び）が深まっていくことを実感することができています。協同的な学びってこういうことなのかなあ、と改めて考えさせられました。先生方も職員室や廊下でのちょっとした会話から、気づきや考えたことが深まったという経験はたくさんあるのではないのでしょうか。そんな同僚性も大切にしていきましょう。

読み手が詩の中に入って  
いくのではない、詩の心が  
自分の中に入ってくるのだ。  
詩の授業 谷川俊太郎

幸せな子はよく学ぶ。  
幸せな子は人を攻撃しない。  
幸せな子は来る未来の困難  
に立ち向かう力を蓄えて  
おくことができる。 ねんごん

【研修センター内にある掲示版より】 ※右以外のもの

- 授業は、子どもたちが深いところにしまいこんでいる宝物を探り出す仕事である。 <林 竹二氏>
- 「学び合う」の「合う」には、人と学びとのつながり、人と人とのつながりが象徴されている。 <石井 順治氏>
- 音読は読みの練習ではない。他者がどういうふうを読んでいるかをきくことによって、自分の読んでいる世界とのすりあわせをしながらそのイメージの世界を何層にも作っていくことだ。

<秋田喜代美氏 三小講演会から>

熟慮することが対話を  
生み出すのではない。  
対話することが熟慮を  
生み出す。  
「子どものための教育学」リチャード

## 夏のセミナー・研修講座が開催されました

7月24日（水）から始まった今年度のセンター研修でしたが、のべ500名を超える先生方に受講していただきました。どの講座でも、参加された先生方が真剣に講義を聴き、演習などに意欲的に取り組んでいる姿がみられました。今年度はPlant（全国教員研修プラットフォーム）を通して申込みいただきました。当センターとしても初めての対応で、何かと行き届かない点もあったかと思いますが、真摯に研修に取り組む先生方の姿から、さらなる充実を図って本研修をより充実したものにできるようにしていきたいと思っております。

夏休み中に受講した様々な研修を生かして、より充実した授業ができるよう願っています。



## コラム 「コトバ主義教育」から抜け出ること その1《No.12》

古屋和久先生は「学び合い」は子どもたち一人ひとりの「言葉づくり」であり、「学ぶ」ことは自分のうちに言葉を持ち、育てることであると言っています。（「みち146号」コラムNo.09）

それと真逆の教育方法(教え方)に「コトバ主義教育」というのがあります。教師が求めるコトバを子どもが言え(れ)ばいいとするもので、幼児教育でも学校教育でも議論されましたが、20世紀末に批判否定された(ことになっています)。

当時の東京都内、ある幼稚園。男の子と女の子がケンカして女の子が泣き出しました。担任の保育者がかけつけて「女の子を泣かしちゃダメ。とにかく『ごめんなさい』と言いなさい」と言いました。男の子はなかなか言いませんでしたが、あまり言われるのでとうとう「じゃあ、ごめんなさい」と口にしました。とたんに保育者は「ごめんなさいと言ったわね。はい、それでいいわ。あっちで遊びましょ」と言って男の子を置いたまま他の子と行ってしまいました。

見ていた別の保育者が驚いて考え込み、自分のクラスの子どもたちに尋ねてみました。「ここに二人の子がいます。一人は、叱られるとすぐ『ごめんなさい』と言うけど、またすぐ悪いことをする。また叱られると『ごめんなさい』と言って、100回『ごめんなさい』を言う子がいます。もう一人は、なかなか『ごめんなさい』を言えない、しかし、もう二度と同じようなことはしない。どちらがよい子だと思いますか?」すると子どもたちは全員「100回、ごめんなさい、を言う子」と答えたそうです。問いかけた保育者は呆然としたそうです。これは、自身障害者であり「竹内レッスン」を通して深く日本の教師たちに影響を与えた演出家の竹内敏晴氏の報告です。（「教師のためのからだとことば考(1999)」竹内さんは、これが現在の学校教育の「コトバ」の教育の到達地点であると指摘し、さらに「置いて行かれた男の子」のことを深く心配しています。

私は須賀川市や三春町の保育に関わっていますが、私の知る保育者たちは、子どもにトラブルやケンカがあると互いにていねいに話したり聴き合ったりすることを促して、よりなかよくなったり、成長したりするチャンスだと言います。なかなか言葉にならない思いに寄り添い、内なる「ことば」をていねいに聴き、つむぎ合わせることが大切な保育であると言います。

「ことば」と「コトバ」、ちがいますね。

今回は、小学校へのつながりも含めて考えてみましょう。